

末期の水

内藤 真理子

母はその最期を我が家で暮らしていた。九十九歳の彼女は、ほとんどの時間、ベッドに横になりテレビを見たり、うつらうつらしたり……。

「テレビってありがたいねえ、退屈しないもの」と口癖のように言っていた。

それが「体中が痛い」と言い出したのは死の三日くらい前だった。往診をして貰ったら、先生は痛み止めの注射を下さって「時々口を湿らせて水を上げて下さい」と言い、水を入れた皿と、脱脂綿と割り箸を用意するように指導された。その時、何だか「末期の水」みたいじゃない、と頭をかすめた。

それでも夕方になってから、私はテレビを見ている母に、

「お水を飲む？」と言って、用意した脱脂綿を少し丸めて割り箸で持ちながら皿の水に浸して母の口を持って行った。そして唇に宛がった。脱脂綿の水はこぼれることはなく唇を湿らせ、わずかに口内に入ったようだった。

その時、まるで私が死に水を摂って引導を渡したかのように、母の魂が抜け出してしまったかのように思った。どうしてそう思ったのか不思議なのだが、現実には、夕食を持って行くときちゃんと箸をつけ、トイレにも一人でベッドを降りて歩いて行ったのに。

そして翌朝、私を待っていたように、ベッドに仰向けに横になった状態で、頭を斜め前の私と目の合う位置にして目をつぶり冷たくなっていた。医者がすぐに来てくれ、臨終を言い渡してくれた。

あまり苦しまず、あまり人の手を煩わせることもなく、あっけなく旅立った所為か、私は後々迄、母の死を私が決めてしまったような罪悪感にさいなまれた。

広辞苑によると、末期の水とは、人の死のうとする時、その口中に注ぐ水。浄とあった。

私は、先生が水を飲ませるようという飲ませ方を守っただけなのに……。

葬儀のために実家に母を連れ帰り寝かせたら、白い布団の前には水を入れた皿と綿と箸が用意されていた。私は改めて綿に水を含ませて母の唇をなぞった。

「これが末期の水なのね」と新たに威儀を正して。